

人生の価値

学生達は困難な状況に生まれてくるくらいなら、中絶されたほうがましだと言いました。

私が参加したディベートは、どんなに中絶が私達の社会をむしろよんでいるかを教えてくれました。そのディベートは、ボストンの西の外れにある大学で行なわれまして。私のディベートの相手は、NARAL（全国中絶権擁護運動連盟）の代表の女性でした。

私達は最初にそれぞれ12分ずつ演説をし、それから聴衆から質問を受けました。私に与えられた12分の間に、私は胎児が生きた人間であり、そして中絶はその人間の全てを奪うという事実を明確にしました。相手側の主張は、いつ胎児が生命を持つかに関しては統一した見解がないという弱いものでした。しかしながら、質問時間の間に、中絶は人間を殺しているのであるという事実を異議を唱える人は誰もいませんでした。

その部屋にいた百人程の学生は、大抵が二十代のように見えました。ほぼ全員が中絶の合法化に賛成でした。質問をするどころか、彼らはただ中絶反対の立場を攻撃し続けるだけでした。

私を驚かせたことは、その攻撃

が、最適条件になれば人生は生きている価値がない、そして子どもを持つことは大きな負担であるという考え方に基づいていることでした。何度も何度も学生達は、困難な状況に生まれてくるくらいなら中絶されたほうがましだという考え方を明らかにしました。

次のような親友を持った女性がいました。その親友は、レイプによる妊娠の結果生まれ、赤ちゃんの時に養子に出されたのでした。この女性の話によると、その親友は自分を産んでくれた母親が自分を中絶してくれていたからよかったのかもしれないと思っているとのことでした。もし母親が自分を中絶してくれていたら、自分はレイプの結果生まれたということ意識して生きなくてよかっただろうというのがその理由でした。

赤ちゃんの時に、養子としてもらわれていった女性がもう一人いました。彼女も、自分の母親が自分を中絶することができていたらよかったのと思っていると言いました。というのは、彼女は五才の時に、自分を引き取ってくれた母親の死を経験し、それからの彼女の生活は大変だったからでした。

二人の若い女性が未婚の状態で

子どもを産んでいました。彼女達は、中絶するよりも産むことを選んだのでした。しかし、彼女達が、我が子の生まれ方の特異性よりもむしろ子どもを育てることの大変さを強調したことに私は驚きました。

私はディベートの後、シヨックを受け、ひどく落ち込んでしまいました。中絶は人間の生きる権利を奪うということを実証するための情報を提示することができません。しかし、人々が自らの生きる価値を否定する時、生きることに価値があることを証明できるでしょうか。たくさんの方々が、自分の人生の価値さえも、自分が愛する人の人生の価値までも否定するとは、私達はどうなってしまうのでしょうか。

ずいぶん考えた後、私は、わが国の中絶を認める法律は、このように人生の価値を、すでに生まれている人々の人生の価値さえも、私達が愛する人々の人生の価値さえも、当然将来のことを考えて歓喜するはずの人々、つまり、若く健康な人々の人生の価値さえも否定することを産んでしまった、という結論に達しました。

一度、胎児が本当に人間であり、生きていくということ認識すれば、中絶を正当化するためには、人は生きる価値がない、だから生命が失われても大したことはないという理由を考えなければならぬのです。

この問題にたいしては、このように、究極的な人生を否定する考え方を認識し、それに対処することが必要です。

苦しみや困難は誰の人生にもあることであり、苦しみや困難は人生そのものの価値を否定するものではないということ、苦しい経験や困難な状況は耐えることができ、克服することもできる時があること、私達を有能で強い人間にするのは、しばしば私達にとって最も辛く苦しい時であることを現代の若者は理解する必要があること。

中絶反対の立場をとる私達が、喜びと心の痛みが交ざりあつた形で、このように人生の価値を認識できるのは、信仰の為せる技なのです。私達が中絶反対を叫ぶ時、私達はまた、希望がないことや人生の素晴らしい贈り物が理解できないことに対しても、異議を唱えているのです。多分、こういう訳で、中絶反対のメッセージは、世俗的な社会によって強い抵抗を受けるのでしょうか。というのは、究極的には、中絶反対のメッセージは福音のメッセージだからなのです。それによれば人生は神様からの贈り物であり、良きにつけ、悪しきにつけ、私達の境遇もその贈り物の一部であり、大切にしなければならぬ贈り物なのです。

ホーリー・トリンプル

「違いなどない」「とっくに議論

中絶支持者たちが中絶を正当化するための主な項目を三つあげて見ると、まず第一に、まだ人そのものではなく、人になるであろう時期と、人が存在する時期との間に線を引くこと。二つ目に、人は一体どの時点から人となるのかという懐疑論。そして三つ目が、子宮の中にあるものが最初は人ではなく、徐々に人になっていくという非人間から人間へのスムーズな移行を説く考え方である。さて、これらには、一つの明確な事実が隠されている。つまり、子宮にはいのちが存在しており、それは母親とはまったく別の存在で、成長しそして誕生するもの、つまり新生児だということである。

この新生児を殺してしまったとしよう。まず、その子どもを生涯を閉ざしてしまふことになる。将来をすべて奪ってしまうことになるのである。そしてその子が約束されていたであろう最も基本的なものを奪ってしまうことになる。つまりその子のいのちである。これがとんでもない道徳的悪であることは明らかである。

では新生児を、産まれる直前に殺したとしよう。子どもの将来をすべて奪うことになる。それより前に、そしてずっと前に殺したとしても、結果は同じことである。重要なのは、子宮の中のいのちをどの時点で破壊しようかと、子どもの将来を奪ってしまうことには何の変わりもないということである。このように考えると、早ければとく遅ければといった議論は一切何の意味を持つというのだろうか。どちらにせよ、子宮内のいのちは将来を絶たれることになるのである。

以上のことから、どの時点に線を引くべきかと、最も適切な場所がどこかと、あるいは非人間から人間へのスムーズな移行と云うことは、まったく関係のないことだとわかるはずである。子宮内の子どもには、自分の生涯が早めか遅めに奪われるかなど、(苦痛以外は)まったくどうでもいいことなのである。結果は同じなのだから。つまり、未来を奪われ、信じがたい道徳的悪に見舞われるのである。

眠っている人を夜寝付いてから5分後に殺そうと、朝目覚まし時計が鳴る5分前に殺そうと、(痛み以外)本人には関係のないことである。どちらにせよ、その人の将来すべてを絶えさせてしまふのには変わりはない。子宮内の子どもは、「眠っている」状態に当てはまるのではないかと思う。どちらにしても、その人の存在は終わりなのである。

「胎児」が単なる「潜在的人間」だとしても、中絶は間違っている。その人の生涯をすべて破壊してしまうことになるからである。

以上のことから、どの時点に線を引くべきかと、最も適切な場所がどこかと、あるいは非人間から人間へのスムーズな移行と云うことは、まったく関係のないことだとわかるはずである。子宮内の子どもには、自分の生涯が早めか遅めに奪われるかなど、(苦痛以外は)まったくどうでもいいことなのである。結果は同じなのだから。つまり、未来を奪われ、信じがたい道徳的悪に見舞われるのである。

とである。どちらにせよ、その人の将来すべてを絶えさせてしまふのには変わりはない。子宮内の子どもは、「眠っている」状態に当てはまるのではないかと思う。どちらにしても、その人の存在は終わりなのである。

「胎児」が単なる「潜在的人間」だとしても、中絶は間違っている。その人の生涯をすべて破壊してしまうことになるからである。

以上のことから、どの時点に線を引くべきかと、最も適切な場所がどこかと、あるいは非人間から人間へのスムーズな移行と云うことは、まったく関係のないことだとわかるはずである。子宮内の子どもには、自分の生涯が早めか遅めに奪われるかなど、(苦痛以外は)まったくどうでもいいことなのである。結果は同じなのだから。つまり、未来を奪われ、信じがたい道徳的悪に見舞われるのである。

以上のことから、どの時点に線を引くべきかと、最も適切な場所がどこかと、あるいは非人間から人間へのスムーズな移行と云うことは、まったく関係のないことだとわかるはずである。子宮内の子どもには、自分の生涯が早めか遅めに奪われるかなど、(苦痛以外は)まったくどうでもいいことなのである。結果は同じなのだから。つまり、未来を奪われ、信じがたい道徳的悪に見舞われるのである。

るものであるとしても、中絶を支持するものではない。人がどの時点で人間になるかを確実に正確に把握はできないというが、人が存在する重要な可能性がある間は、妊娠というタイムフレームを私たちが把握している。そのような重大な可能性がある場合には、私たちはそのいのちを人間として大切に扱わなければならない。その「いのち」に対してあらゆる疑念から恩恵を与えなければならないのである。

徐々に人間へ移行していくという考え方にも中絶を合理的に支持する力はない。第一に、これはあくまでも単なる仮説に過ぎず、何の証拠もないからである。だから、この立場が間違っているという可能性は大いにあり、人間は妊娠中から存在することを意味するものでもある。

第二に、その考え方をよくよく見ると、それが事実であるはずがないことがわかる。(a)「少しずつ発達」ということは、私の成長におけることであって、人間としての存在におけるものではない。過去のどの時点においても、どんなに私が成長を遂げていなくても、私は常に「私」であり、人間として完全であった。(b)もし、「徐々に発達」というのが人間になるまでの過程を指すのであったならば、

どこにいても人は人。
たとえ
母親のおなかにいようと



その中間点では「半分の人間」が存在することになる。それはあり得ない。(c)車は工場のベルト・コンベヤーで徐々に組み立てられていく。人間になるということは、車の場合とはまったく違い、他のものとは完全に異なるものである。

第三に、「タイム・フレーム」の問題がある。成長が遂げられた時点で人間として完成を遂げないとするならば、新生児は完全な人間ではなく、幼い子どもは年上の子どもよりも「低い人間」であり、子どもが若いほどその子を殺しても間違いではないということになってしまふ。このようならばかけた示唆をする。仮説は間違いに決まっている。

(3ページへ)

要約

「違いなどない」という議論

どこに線を引くべきかとかが、線ではなくスムーズな人間への移行があるといったことが、まったくの見当違いだということが以上からわかったはずである。今一番問題となっているのは、中絶で殺されようとしている子どもにとつて、その時期が早かろうが遅かろうが、一体どのような違いがあるというのか、ということに尽きる。いつ行われようと、将来全てを奪い取ってしまうことになるのである。

最後に一つ。懐疑的な考え方をする人たちが、人は徐々に発達すると信じる人々には共通の誤った認識がある。つまり、いのは発達することで人間になるという考え方である。前者は「人間になる」瞬間が発達の過程にあると説くが、それが一体いつなのかを私たちは知らない。また後者はそのような瞬間はなく徐々に発達すること自体が非人間から人間への移行であると説いている。

とんでもないことである。発達によって人間でないものが人間になるわけではない。人はすでに人間として存在している。そして同一の人間として発達を続けるのである。

ステイブン・D・シュヴァルツ

十代の性

(32)

質問：未だに中絶はある一定の状況においては認められるべきだと思っています。もし赤ん坊がひどい奇形児で、出産後間もなく死亡することがわかっていたらどうでしょう。その子どもはいずれ死ぬことがわかっていながら、中絶は正当化されるのではないのでしょうか？すぐに死ぬことがわかっていながら、赤ん坊のいのちを救うために多額の金を費やすことはないのでしょうか？



平和を破壊するいちばん恐ろしいものは墮胎です。なぜなら、子どもを殺すのはその子の母親自身だからです。…若い女性達は両親を恐れ、世間の人々を恐れるあまりに、墮胎することがよくあります。でも彼女たちを助けなければなりません。

(マザー・テレサ)

答え：実生活にかかわる多くの問題は容易に結論が出せるほど明快なものではありません。だからこそ良心のある決定を下すために、私たちは明快で根拠のはっきりとした倫理的主義をみつけることが重要となるのです。その主義の一つに、罪のない人間を故意に殺すことが、例えばその人がひどく奇形であろうとも、決して正当化されるものではないということがあげられます。この主義は、医学の世界において伝統的に受け入れられ、また今日まで問題にされずに

来たものですが、助けを必要としている病人や障害者のいのちを守るケアにつながっています。それは、人が自殺したり、人に食料を与えないなどの基本的な治療を怠ったりすることに立ち向かうというものでもあるのです。赤ん坊が奇形だからという理由で中絶を受け入れることは、病気や障害を「治す」ために患者を殺すことと等しいのです。この倫理は、利用価値があるからといって治療すべき人間と、価値がないので破棄する人間を、

必然的に決めてしまうものです。このような評価は特に新生児、障害者、高齢者、不治の病に苦しむ人、そして集中治療を必要とする人々に対して行われがちです。悲しいことに、価値ある人生を送ることができないという理由で食べ物やいのちを守る手術を拒否された赤ん坊の例はすでにたくさん報告されているのです。

しかし、そのような赤ん坊のために、多額のお金を無意味に使う必要があるのでしょうか？ここで、医療にはいくつかの目的があることを忘れてはなりません。つまりその目的には、いのちを脅かすような状況から克服して健康を回復させるだけではなく、苦痛や痛みあるいは障害を少しでも和らげるということも含まれているということです。つまり、医療には連続性があり、完全な治療から苦痛の兆候をコントロールしたり死にそうなる患者をできるだけ楽にしてあげるといふものまで多岐にわたるものなのです。よい治療とは、患者にとつて最適な治療法を決定してあげることなのです。

a 均整のとれた手段
私たちの日常生活において、現状が要求するものに対する回答は常に均整のとれたものでなければなりません。例えば、他人の浅はかな言動に対してかっとなつて手を出し、けがを負ったりする十代の若者はばかかっているし成熟していないと受けとめられるべきでしょう。同じように医療の面においても、患者を救うためには均整のとれた手段を用いるべきなのです。余計な出費(人間的、感情的、経済的に)を伴わずに患者のためになるような治療、手術、薬などです。反対に成功の可能性が少なかったり痛みや危険、苦痛、出費あるいは他の困難を助長するような均整のとれていない手段を用いる必要はないのです。ほとんどの親にとつて財源は限られていて、赤ん坊のいのちを数日あるいは数週間延ばすためだけに高額な大手術を行うのは合理的ではありません。それでもやはり、赤ん坊は死ぬまでは十分な食料と基本的な治療に支えられるべきなのです。

以上をまとめると、奇形児の治療には、その赤ん坊の状況にきちんと合った医療を施すことが求められます。赤ん坊を行動(中絶あるいは幼児殺し)や怠慢(食事を与えないなど)によって殺そうなどとしては決していけないのです。しかしながら、赤ん坊を殺すことと均整のとれていない手段で延命させることには重大な違いがあるのです。



日本プロ・ライフ・ムーブメント事務所

〒780-0062

高知市新本町一丁目7-31

電話/Fax: 088-873-3619

e-mail: prolife@i-kochi.or.jp

http://www.japan-lifeissues.net

For English Speaking People /evening: Tel/Fax: 088-843-0406 Email: nvt56n@ps.inforyoma.or.jp

事務所時間:

月一金 10:00 - 17:00

土曜日 休み

日曜日 休み

会員募集

寄付: 十万円 五万円 三万円

一万円 五千元 一千元

無料: 毎月プロ・ライフ・ニュースレター

あなたの寄付はまだ生まれていない赤ちゃんを守る運動のため使用させて頂いております。私たちと一緒に小さいいのちを大切に育みましょう。

御送金

銀行: 四国銀行朝倉支店

口座番号: 0573553

日本プロ・ライフ・ムーブメント

郵便局: 「郵便振替」

口座番号: 01660-5-39607

日本プロ・ライフ・ムーブメント

事務所便り

寒さが最高潮の月となりました。皆様、お風邪を召していませんか？

さて、産経新聞の11月3日の記事によりますと、相模原市教育委員会が性行為容認の指導書を小中学校教員に配っていたことが分かりました。問題となり、八月に絶版回収となったあの『思春期のためのラブ&ボディBOOK』も保管して、市内の中学三年生全員に卒業時に配付すると言っています。(海老名市、藤沢市:等も保管している様です。)小学六年生の授業で性行為を『ふれあい』と紹介するよう指導している、とんでもないことです。私たちの子どもたちが通っている学校は性教育をどのように教えているでしょうか。子どもたちの言葉に耳を傾けてみましょう。

中絶については、『日本では中絶は許されている、日本のお医者さんの中絶手術の技術は信頼出来る...』と書かれていますと言います。これらは私たち大人が子どもたちに伝えたいメッセージでしょうか。

アメリカは以前、今の日本のように避妊教育に力を入れ、十代の中絶が、30%も上がりました。それで、性教育の方向を転換して、自己コントロールと人格形成の重要性や、生命尊重教育をするようになり、十代の中絶一位のテネシー州リアー郡が年月の経過とともに、ほとんど妊娠率が低くなって行った、と山谷えり子国會議員がおっしゃられました。私たちの事務所でも扱っているカラー・パンフレット(折込チラシ参照)は2011年までありますが、きつと子どもたちを自己コントロール出来る状態へ励ましていけるものと自負しております。

皆様お一人おひとりがこのような今の日本の性教育に関心を持って下さり、近くの公立学校を訪問して下さって、これらのパンフレットをお渡し頂けますようにと願っております。

(日本プロ・ライフ・ムーブメント)

看護婦の辞職

5人の看護婦は、アフター・ピルを患者に提供するの、宗教的信条に反するとして、勤めていた病院を辞職しました。

アフター・ピルとは基本的に、無防備な性行為の後、妊娠を防ぐために72時間以内に、普通のピルを多量に服用するものです。これによって受精卵が子宮壁に着床して受胎させることを妨げます。この薬は、第7週目までの妊娠の時に中絶を引き起こすために使われるRU-486と同じものではありません。

クリスチャンである看護婦たちは妊娠について何年もかけて女性達に話し続けています。

診療所に医者が不在の時には、看護婦達がアフター・ピルを処方しなければならぬと言われたのが、事の発端でした。薬剤を手渡すことを拒絶することは患者のすべての選択権について助言するよう命じている米連邦政府の法律に違反することになります。「この質問に答えることができる人を知っていますか、それは、国ではありません。」と看護婦のミシェル・ディアスは言いました。

「私は妊娠中絶過程に関わりたくありません。」ディアスは言いました。ディアスには2人の子どもがいて、現在妊娠4ヶ月です。「私は、自分自身で選択する権利があります。妊娠中絶に加担した手で、自分の家族と向き合うことはできません。」

国はアフター・ピルの利用者が増加し

ている中で、看護婦に職務契約書にサインするように要請していますが、看護婦から反対が出ていますと国の健康公益事業局の責任者であるケン・コーエンは述べています。

「私達が許容できないのは、宗教的な観点から、我々のスタップが彼女らの意見を患者に押しつけることでした。」コーエンは言いました。

ある妊娠中絶反対者は、3日間で女性が妊娠したかどうか判断するにはあまりにも早すぎるという理由でアフター・ピル使用に反対しています。

しかしながら、看護婦のニッキー・トラーズは、妊娠は3日後ではなく瞬間のことなので、結局それは妊娠中絶になると信じています。「これは神が私に対して望んでいることではない」ということを知っています。」と彼女は言いました。

妊娠中絶に反対したり、それらの信念を守る運動をすることは不道徳なことではありません。カルフォルニアのロスアンゼルス医科大学で倫理学のリーダーでもあり、医療関係の教授であるスタンリー・コレンマンはそう言っています。

「彼女らは自らの信念を守る権利を与えられていると私は思います。だから、その診療所で勤務する必要はありません。」とコレンマンは言いました。

サクラメントの会1999.6.21.